

平成22年 4月15日現在

研究種目：若手研究（スタートアップ）

研究期間：2008～2009

課題番号：20830107

研究課題名（和文） デューイ教育理論の根本問題の解明 現代教育のアポリアの解消

研究課題名（英文） Elucidating the Fundamental Problems of Dewey's Educational Theory:  
Resolving the Aporia of Contemporary Education

研究代表者

苫野 一徳（TOMANO ITTOKU）

早稲田大学・教育・総合科学学術院・助手

研究者番号：70507962

研究成果の概要（和文）：デューイは教育の目的を、「経験の絶えざる再構成」「より以上の成長」とし、従来の絶対的教育目的の観念を相対化した。これはきわめて有意義かつ妥当な言明ではあったが、しかしこの原理によるのみでは、教育はどのような経験を具体的に構想していけばよいのか、はっきりしない。本研究では、この問題を現象学的に解消する理路を提示し、さらにここにヘーゲルの洞察を援用することで、教育的経験＝「成長」の指針原理を明らかにした。ひと言で概念化すると、「各人の自由 および社会における 自由の相互承認 の 教養 を通じた実質化」となる。

研究成果の概要（英文）：Although Dewey's principle of educational aim, referred to as "more growth" or "continual reconstruction of experience," is considered significant and valid, this principle alone cannot fully envisage education. I attempted to reconstruct his empirical philosophy by the intentional analysis methodology of phenomenology, along with executing essential insight with Hegel's vision. Then the guiding principle of educational experience=growth was submitted as follows: "realizing each individual's freedom and the mutual recognition of freedom as the principle of society through culture."

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
平成20年度	690,000	207,000	897,000
平成21年度	600,000	180,000	780,000
総計	1,290,000	387,000	1,677,000

研究分野：教育学

科研費の分科・細目：教育学

キーワード：デューイ 教育目的 現象学 ヘーゲル

## 1. 研究開始当初の背景

本研究には、大きくって2つの背景があった。1つは、教育は「個」のためか「公」

のためかという対立や、子どもの興味・関心・経験から始めるか、あるいは知識を教え込むか、という、教育学における古典的ともいえる対立問題である。これら対立は、近年

ますます複雑な様相を呈しながらクローズアップされている。

前者については、たとえば「悪しき平等主義」から脱するため、能力や「個性」に応じた教育を求める「新自由主義」的思考方と、教育における「平等」を順守しようとする考え方の対立がある。あるいはこの「新自由主義」もまたさまざまな理由で結びつく「新保守主義」が力を増し、共同体を尊重せよという考え方が強まる一方、個々人の自由や個性を尊重せよという考え方との対立も強まっている。

後者については、旧来の児童中心主義（新教育）に対する伝統主義的教育からの批判に加えて、さらに経済社会的観点から、経済社会で生きるためには、そしてまた経済格差を是正するためにも、子どもの興味・関心とはかわりないある一定の「知識」を「教え込む」べきだという批判が力を増している。これら教育の現実問題は、いまだ有効な考えが提示されていない、教育（哲）学が解明すべき喫緊の課題である。

もう一つの背景は、上記問題を解消したとされるデューイの思想が、今なお十全に理解されていないと同時に、彼の哲学原理それ自体が、この教育問題を原理的には解消し切れない方法的不徹底さを備えていたことである。デューイ経験哲学は「経験の形而上学」か「現実在の形而上学」かと一般にいわれる問題がそれである。この点については多数の先行研究があり、今日にいたるまで激しい論争が続いているが、それらを検討した上で、報告者は本研究開始以前に、デューイ経験哲学を現象学的に再構築することで、その根本問題を解明する研究を行ってきた。その研究過程において、報告者は上述した教育（学）における根本問題もまた、デューイ教育思想を鍛え直すことで解明することができるという着想を得た。

## 2. 研究の目的

上記研究の背景を受けて、本研究の目的を以下のように設定した。

デューイは、自身の経験哲学の方法に基づいて、それまでの教育（学）における問題圏を大きく転換・進展させたとされている。とりわけ、教育は「個」のためか「社会」のためか、という教育目的の対立や、子どもの「経験」から始めるか知識の「教え込み」から始めるか、という教授法の対立等、教育理論における諸対立を解消したとされている。

しかしこれら対立は、先述したように今日においてもなお教育（学）の根本問題であり続けている。そして本研究以前において、報告者は彼の経験哲学の原理それ自体を現象学的に再構築することで、デューイ教育理論

を基礎付け体系化することを可能にする視座＝方法を提示した。

そこで本研究は、こうして基礎付けられた方法によって、デューイが提示した多数の教育理論をより原理的なものとして鍛え直すことで、教育における上記根本問題を解消することを目的とした。特に本研究では、上記2つの対立に対応する、デューイ教育理論における2つの根本問題を解消することを目的とした。

1つは、それまでさかんに論じられてきた教育の究極目的を相対化し、教育の目的は「成長」それ自体にあるとしたデューイが、しかしでは教育的にいったどのような「成長」を志向すべきか、その指針を明らかにできなかった点である。もう1つは、知識とは個々人の経験とは無関係に客観的に実在するものではなく、いつでも個々人の経験において立ち現れるほかないがゆえに、既成の知識を教え込むことは不可能であるとして経験主義的教育方法を提起したデューイが、しかしそうは言っても、実社会においては個々人の興味・関心・経験とは無関係に「知識」を教える必要があるという批判に対して、有効な答えを示すことができなかった点である。

本研究では、デューイ教育理論をより原理的なものとして鍛え直すことで、とりわけこの2つの根本問題に有効な答えを与えることを最大の目的とした。

## 3. 研究の方法

上記目的を達成するために、本研究では、まずデューイ経験哲学に現象学の志向的分析および本質観取の方法を導入するという方法を用いた。その上でヘーゲルの洞察を援用することで、デューイ教育理論を根底から支える理路を提示した。（デューイはかつてヘーゲル主義者であったが、その後これを批判的に克服し自らのプラグマティズムを構築したとされている。しかし本研究の過程において、とりわけヘーゲルの社会論に関する洞察については、再びデューイ哲学内に取り組むことが原理的かつ妥当であることを明らかにした。）

## 4. 研究成果

研究目的1についての成果は、以下の通りである。

これまでのデューイ研究の歴史において、デューイ教育目的論の内実をより深く解明するものは数多くあっても、ではわれわれはどのような経験を「よい」といえるのか、さらにいえば、どのような教育的経験を志向して教育、とりわけ公教育を「構想」するのが

よいか、という問いに対する、明確な構想指針原理は提示されてこなかった。そして本研究ではまず、デューイ経験哲学の方法による限り、この問いに対する明快な回答はそもそも不可能であることを明らかにした。教育的な成長とは、つまり連続的な成長一般を促進することである、とデューイはいうが、このいい方は、結局のところトートロジーに過ぎないといわざるを得ないからである。

確かに「より以上の成長」とは、そこに絶対的ゴールがない以上、絶えざる成長だとか不均衡の発展的回復だとかいう、幾分トートロジカルないい方でしか表現され得ないものである。しかしこのようないい方には、どうしても決定的な弱点が付きまとう。つまり、「ではわれわれはどのような成長を志向すればよいのか」という問いに答えることが困難になるということ、より正確にいうと、どのような教育的経験＝成長を、教育は具体的に構想すればよいのかという問いに、答えるのが困難になるという弱点である。

そこで報告者は、前述の方法に従って、「よい」経験の現象学的本質観取を行い、ここにヘーゲルの洞察を組み込むことで、上記問題に回答した。結論をいうと、教育的経験＝「成長」の指針原理は、「各人の自由 および社会における自由の相互承認の実質化」として定式化される。

「よい」経験について現象学的本質観取を行うと、そこには必ず「自由」の感度（実感）がある。「自由」はヘーゲルによって諸規定性における選択・決定可能性の感度と定義されているが、「成長」とは、まさにこの感度を得るところにこそある。本研究ではこのヘーゲル「自由」論の検証も行った。

しかしヘーゲルが洞察したように、各人は条件が整えば不可避免的に「自由」をめがけてしまうがゆえに、この「自由」を求めて争い合ってきた。近代社会思想の大きな目的は、この長い争いに終止符を打ち、各人の「自由」を十全に保障することにあった。そしてそのための原理は、ついにヘーゲルによって、「自由の相互承認」としてまとめあげられた。各人が「自由」なりたいと思うならば、社会の原理が「自由の相互承認」であることを認めるほかない。

この原理を理念的に保障するのが、法＝権利である。そして教育は、これを現実化（実質化）するものとしての本質的機能をもつのである。したがって公教育の本質は、「各人の自由 および社会における自由の相互承認の教養を通じた実質化」として定式化することができる。デューイのいう「成長」は、こうして、社会思想の観点を組み込みつつ、「自由の相互承認」を基底とした各人の「自由」を実質化すること、と、その内実をいいあてることができるようになる。

以上が研究目的1の成果である。

研究目的2の成果は、以下の通りである。

デューイは、「興味・経験」が「教え込み」という対立を、いわば「興味」の側で一元化した。しかしこの方法はなお、しかし子どもたちの「興味」や「経験」にかかわらず「教え込む」べきことはある、という反論に、十分な回答をなし得ていない。そこで報告者は、以前に行ったデューイ経験哲学の現象学的再構築を踏まえて、この問題を次のように解消した。

基本戦略は、デューイのいう「興味」や「経験」の概念を、教育（教授）における方法上の概念　つまり、「興味」を活かした教育とか、なすこと（＝経験）によって学ぶ、とか、そうした方法上の概念　と、認識の原理としての概念とに、区別して提示するというものである。

「興味」を活かした教育や活動的経験を通じた教育、というものは、「教え込み」や「詰め込み」と同様、方法論の問題である。そして、「興味」「経験」が、それとも「教え込み」が、という対立が、そのような方法を巡る対立であったとすれば、その対立は不毛というほかないものである。方法は常に、目的によって可变的に選択されるものだからである。

最も直接的な「興味」や「経験」を活かした教育が、有効な場合もある。「直接的興味」をできるだけ基軸にした教授法が、極めて効果的であることはいままでもない。一方、ある程度の「教え込み」が最も妥当かつ効果的な場合もある。たとえば、手洗いうがいを「教え込む」母親の「教育」などがそうである。この方法は、子どもがまだ自分の健康を自分で管理することができないという「状況」、したがってこれを一刻も早く学習させる必要があるという「目的」からいって、最も妥当かつ効果的な方法であろう。

要するに、できるだけ直接的な「興味」「関心」「経験」を活用するか、あるいはある程度「教え込む」といった方法は、その時々々の目的や、子どもの成長段階、その他種々の状況に応じて、可变的なのである。

しかし他方で、認識の原理としての「想像力」「興味」「経験」の概念は、以上述べてきた方法上の概念とは、その次元を異にするものである。教授において、どのような方法をとるにせよ、学習者がそこで学ぶ（認識する）ことは、彼らの何らかの「興味」に相関的にしか、そして彼らの「経験」においてしか、認識され得ない。認識論的にいえば、純粋な「教え込み」はあり得ないのである。つまりどのような教授法を構築あるいは選択するにせよ、われわれは常に、学習者の「興味」を、その基軸とせざるを得ないのである。

以上、「興味」を方法論と認識論の2つの概念に区別する戦略によって、「興味」が「教

え込み」かの対立は、認識論的には「興味」を基軸にするほかないが、方法論的には、目的・状況相関的に選択可能であると回答することで解消されることを明らかにした。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計3件)

1. 苜野一徳「教育的経験 = 『成長』の基準の解明素描 ―ヘーゲル哲学のデューイ教育哲学への援用」、『日本デューイ学会紀要』第50号、pp. 91-105、2009年。査読有
2. 苜野一徳「現象学によるデューイ経験哲学のアポリアの克服」、『構造構成主義研究』北大路書房、第3号、pp. 110-136、2009年。査読有
3. 苜野一徳「ヘーゲル『自由』論の射程 ―社会原理論としてのヘーゲル哲学再考」、『イギリス理想主義研究年報』第5号、2009年。査読無

〔学会発表〕(計5件)

1. 苜野一徳「エマソン政治思想の可能性 ―現代政治哲学の観点から」日本デューイ学会、椋山女学園大学、2009年10月4日。
2. Ittoku TOMANO, "How Can We Elucidate the Legitimacy of Education? : The Phenomenological Meta-methodology of Education as a Science of Essence", The 28<sup>th</sup> International Human Science Research Conference, Molde University College, June 19<sup>th</sup>, 2009.
3. 苜野一徳「公教育の『正当性』の原理 ―ヘーゲル哲学の教育学メタ方法論への援用」教育哲学会、慶応大学、2008年10月25日。
4. 苜野一徳「教育的経験 = 成長の基準の解明素描 ―ヘーゲル哲学のデューイ教育哲学への援用」日本デューイ学会、筑波大学、2008年、10月12日。
5. 苜野一徳「ヘーゲル『自由』論の射程 ―社会原理論としてのヘーゲル哲学再考」イギリス理想主義研究会、駒澤大学、2008年7月26日。

〔図書〕(計1件)

1. 岡部美香・高橋舞・谷村千絵・辻敦子・苜野一徳・藤井佳世『子どもの教育と未来を考える』北樹出版、2009年、pp. 106-122。

〔その他〕

ホームページ等

<http://www.geocities.jp/ittokutomano/>

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

苜野一徳 (TOMANO ITTOKU)

早稲田大学教育総合科学学術院・助手

研究者番号：70507962